

#### 講演Ⅳ

### 伝道の結実——教会建設

河野勇一

#### はじめに

今回の研究会議が掲げているテーマである「伝道の神学」の「伝道」とは何かは、必ずしも明快ではない。ひとつの問題は用語法にある。多くの欧米文献の翻訳にあたって、近藤勝彦氏などは「Mission」に「伝道」を当てている<sup>1</sup>。一方、日本の福音主義サークルにおいては大方、「Evangelism」を「伝道」と翻訳し、それよりも広義であるとともに教會的な、あるいは異文化地域への働きなどを意味して使われていた「Mission」を「宣教」（あるときは「使命」と翻訳してきた。本稿は後者に従うこととする<sup>2</sup>。

問題は、用語の使用法や翻訳のことだけではない。もっと本質的には、「Mission（宣教）」と「Evangelism（伝道）」それぞれの意味内容と、互いの関係の問題がある。このことについては、デイヴィッド・ボッシュの卓越した宣教研究である『宣教のパラダイム転換』下巻、265頁以下「エバンジェリズムとしての宣教」の項で、その定義や違いを明らかにする難しさを含みつつ、詳しく論じられているので、それに準じたい<sup>3</sup>。

すなわち、その議論のまとめとして書かれている、「エバンジェリズム（伝道）」とは教會の宣教の要素であり、その活動である。それは、ある特定の条件と個々

<sup>1</sup> 『伝道の神学』5～6、134頁参照

<sup>2</sup> もうひとつ、「Evangelization」という語があり、それは多くの場合、「福音化」と訳される。その意味するところは人によって異なり、あるときには「伝道（Evangelism）」と、別なときには「宣教（Mission）」と同義に使われる。

<sup>3</sup> デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換』下巻、新教出版社、1999年

の状況におけることばと行いによって、どんな所においても、すべての人およびすべての共同体に、その根本的な方向転換への直接的で確かな機会を提供するものである。その方向転換とは、奴隷がこの世とその力から解放されること、キリストを救い主、主として受け入れること、キリストの共同体すなわち教会の会員となること、和解と平和および地上における正義のための働きに加わること、キリストの支配の下にすべてのものを置く神の目的に自らを献げること、等々を含むものである。」(284~285 頁)を基盤にして、以下、広義の「宣教(Mission)の神学」を視野におきつつ「伝道(Evangelism)の神学」を中心に考察することとする。

### 1. 福音主義教会の歴史における「伝道」概念と教会

とはいっても、伝道についての理解はいつも同一だったわけではない。それは、ボッシュがその著書、上巻・下巻の中心である第二部「宣教の歴史的パラダイム」で述べているごとくである。本稿に託されている「伝道」と「教会」の関係に絞ってみても、それぞれのパラダイムが特有の関係を持っていたのである。

ボッシュの前掲書の邦訳編集者である西岡義行氏は、「宣教と教会との関係」を類型化して、以下の4つのタイプに分けていて、わかりやすい。それは、第一のタイプ：教会の付属物としての宣教、第二のタイプ：教会の核としての宣教、第三のタイプ：教会を中心とした宣教、そして第四のタイプ：教会を越え世を軸とした宣教(神の宣教)である<sup>4</sup>。

ここで私は、20世紀の福音主義教会のサークルにおいて考えられ、実践されてきた「伝道(宣教)」観を、農業の類比を用いて、以下のように分類、説明してみたい。もちろん、これらの類型はみな典型的な表現をとっており、他の「伝道」をまったく含んでいないものはないと言ってよい。そこに、最大の力点を置いている伝道観である。

<sup>4</sup> 論文「プロテスタントにおける宣教と教会の相互関係」、『日本福音主義神学』第38号所収、2007

#### (1) 耕地伝道 Presence

この伝道は、キリスト教とまったくなじみのない社会に伝道を試みようとするときなどに、「何の準備なしに直接的に福音を語っても効果はない。まず、生活によって福音を見せ、人々のキリスト教に対する恐れや偏見を取り除き、好意をいだかせるようにする営みが必要だ」とする。そこでの伝道は主に「証し」と呼ばれ、教育、医療、福祉、社会正義などの間接伝道が推奨される。

#### (2) 種蒔伝道 Proclamation

世界中のすべての人に、その生涯において一度はキリストの福音を聞かせることが、伝道の中心的目標とされる。聞いた福音を信じるかどうかは本人の決断次第であるが、キリスト者(教会)の責任は、福音を届けて、信じる機会を提供することとなる。メディア伝道(文書、放送、インターネット)の多くや訪問伝道は、この面が強いといえよう。

#### (3) 結実伝道 Persuasion

これは、(2)の働きによってキリスト者の責任は終わったわけではないと考える。福音を届けた結果として、自分の近親者を含む、できるだけ多くの人が回心して救いを得なければ、愛する者を永遠に失ってしまう。だから伝道は、何とかして人々がキリストを受け入れるように説得しなければならない。教会での伝道集会、クルセード方式による大衆伝道、そして、「四つの法則」などを使っての個人伝道などが思い浮かぶ。

#### (4) 収穫伝道 Incorporation

(3)の伝道でキリストを受け入れる決断をした者は、すべて救われて永遠の命を得たとしても、彼らのその後の地上生活はどうかというと、すべてがその生涯をキリスト信仰に生きるわけではない。いや、むしろ、教会生活に結びつかない者や、信仰の成長を見ないまま数年で信仰を失ってしまう者が多いという現実がある。そこで、伝道はバプテスマを通して「キリストのからだ」である教会に組み入れることまでを目標としなければならないと考えるのがこれである。教会統計で「バプテスマを受けた人数」が大きな位置を占めているところに、その伝道観を見る。

#### (5) 繁殖伝道 Reproduction



以上のような伝道観の変遷のあと、ドナルド・マクギャブランによってさらに新しい伝道論が提案され、それは「教会成長論」と呼ばれた<sup>5</sup>。彼の伝道観を前述の農業的類比にならって表現すれば、繁殖伝道 Reproduction と言えるかもしれない。その画期的なところは、ひとつには「教会成長」という名の示すように、伝道を教会の本質的働きとして捉えたことにある。それに関連しているもうひとつは、それまでは(1)から(4)のように「点」として考えられる傾向が強かった伝道を、それらすべてを含みつつ「線」(プロセス)として継続反復的な視点から捉えたことである。それは当然、教会に加えられたキリスト者を弟子として訓練することを強調する教育的な働きをも含むことになる。

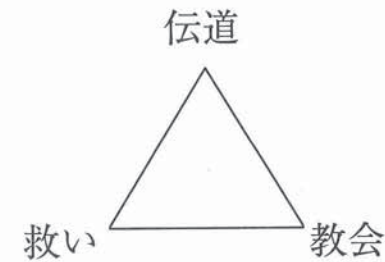
このように見るとき、「伝道」をどのように理解するかという基本的なことが、それと教会との関係を考えることに大きな影響を与える。私自身は、上述の5つの伝道観のなかでは、最後の「繁殖伝道」が総合的・体系的である点から最良と考える。すると、必然的に「伝道」は教会に結実するとともに、教会建設、教会活動そのものが伝道の一環をなしていることとなり、本稿での伝道の射程を示すことにもなる。

## II. 「伝道」の目標としての救い

「伝道」の教会論的議論に入る前に、もうひとつ確認しておきたい前提的事項がある。それは、伝道によるひとりの人の救いについてである。福音主義教会がその伝道観の中心として決してゆずることをしなかったことは、伝道のさしあたっての目標としての「ひとりの人の救い」である。そうであれば、「伝道」と「教会」の関係を議論するときに、ひとりの人の「救い」とは何かを考慮に入れなければ十分ではない。

<sup>5</sup> 『Understanding Church Growth — Fully Revised —』 Donald A. McGavran, Eerdmans, 1980 参照

## <伝道の目標としての救い 結実としての教会>



「ひとりの人の救い」も、伝道がそうであったように、時間的な一点で成し遂げられるものではないと言えるが、ここでは、神学的な救済論の視点から考察してみたい。

A. 救いは、神の国に入ることであるだけに、それと同じ時間的・歴史的広がり(過程)がある。神の国のそれは、現在完了的な「既に (already)」と未来的な「未だ (not yet)」の緊張を持つ現実として説明されているが、救いに関しても同じことがある。また、「直説法の救いと仮定法の救いとの間の緊張における命令法」と言われているようなことがある<sup>6</sup>。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」(エペソ 2:8) とともに「恐れおののいて自分の救いを達成してください」(ペリピ 2:12) ともあるとおりである。

このように、確かにひとりの人の救いは、長い、あるいは生涯にわたるプロセスであることに鑑みて、1737年、ルター派神学者ヤコブ・カルポは、「オールド・サルティス」という用語をもって、それを記述し始めた。そこでは、啓蒙・悔い改め・救う信仰・再生・回心・義認・神秘的結合・聖化・堅信と保持など種々の恩恵の増進が考えられている。以降、ルター派(ホラッツ=ペリピ)、改革派(ベルコフ)、ウエスレアン・アルミニアン、バプテストなどによって、

<sup>6</sup> ボッシュの前掲書 251 頁でも触れられている。

それぞれの救済観に基づいたオールド・サルティス（論理的・時間的順序づけ）が作られていった。ところが、それらに共通する問題点は、救いにまつわる諸々の用語と概念を、論理的であれ（必ずしも時間的でなくとも）一直線上に並べようとしたことである。そして、それぞれのオールド・サルティス間の差異がそれらの教派神学間における救済観論争激化に拍車をかけたと思われる。

それは確かに、聖書の中にある序列への言述例に根拠があるように見えるが（使徒 26:17ff、ローマ 8:29-30 など）、それが救いの順序あるいは増進として述べられたものなのかという疑問が残る。さらには、救いに関する多くの用語を時間的・論理的一直線上にならべようとするには、どうしても無理を感じる<sup>7</sup>。では、聖書が多様なかたちで表現している救いのプロセスを、どのようにまとめることができるであろうか。

前述したような救いの現在完了的側面「所与」と未来的側面「約束」と同様、「直説法の救いと仮定法の救いとの間の緊張」があるが、そこにおける「命令法」に相当することとして、次のことが考えられなければならないと思う。すなわち、救いが現実化するには、神の恵みが一方的に注がれるだけでなく人の信仰によって応答される必要がある。それを喚起するのが、地上における信仰生活において与えられた救いを継続・維持していくとともに深化せよとの「命令法」である（課題）的側面。それらを総合すると、救いについては現在完了的な「所与」に続いて現在進行的な「課題」があり、最後に「約束」としての完成があると表現するのが最良ではないかと考える<sup>8</sup>。

B. それでは、救いに関する多種多様な用語・モチーフはどう理解し、どう秩序づけたらよいのだろうか。オールド・サルティスのように時間的・直線的配置以外の理解が可能であろうか。私は、人間の使う用語にはそれぞれ支配的（中心的）概念があるとの考えによって聖書を観察し、聖書は主に三つの概念によ

<sup>7</sup> バルトも『和解論』Ⅲ/3、241頁以降において、オールド・サルティス（救済の秩序）に疑問を呈している。

<sup>8</sup> ミラード・J・エリクソンも『キリスト教神学・第4巻』（いのちのことば社、2006年）において、救いの時間的次元に言及し、それを、救いの始まり、救いの継続、救いの完成と区分して展開している。

る用語・思想によって説明されているとの結論を得た。それは関係概念、実体概念、目的概念であり、聖書用語で換言すればそれは、契約法概念、生命概念、職能概念である。

このようにキリストの救いを三分類的に理解することは「ウエストミンスター信仰告白」11、12、13章において、すでになされている。もちろん、概念、側面、次元による分類であるとの言明はないのではあるが。「力あるキリスト教へのパラダイム転換」を主張するクラフトも、キリスト教証言には三つの次元、すなわち、真理、関係、力の次元があるとし、これら三つの次元のバランスがとれていなければならないと述べている<sup>9</sup>。

さらに神学書以外のものとして、『「わかる」とはどういうことか』（山鳥重著、ちくま新書、2002年）は、人間が物事の意味を理解、記憶、表現しようとするときには、おもに「ことからの意味」「関係の意味」そして「変化の概念」があると述べている。それは、このような三概念を用いることが、この世での事象の意味を理解することにおいて、学問分野を超えた普遍であることを示唆している。

聖書においては、イエスによる「ルカ 15章の三つのたとえ話」が救いの「所与」について三つの概念で語っている代表例である。「失われた羊」のたとえは救いを「いのちの回復」の概念で、「失われた銀貨」のたとえは救いを「目的（働き）の回復」の概念で、そして「失われた息子」のたとえは救いを「関係の回復」の概念で語っており、救いの物語にここでの代表的三概念を盛り込むことによって、その豊かさを知らせているのである。同様に、「マタイ 25章の主を待ち望む生き方についての三つの話」が信仰生活の「課題」について、この三つの概念からの説明となっている。また、パウロも 1コリント 1:30では「義と聖めと贖い」、13:13では「信仰と希望と愛」の三語をならべているが、それらが、それぞれの概念系列に属するものであると理解するとき、パウロがなぜこのように三つの語をならべたかについて初めてよく説明できる<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> 福田充男編『宣教リーディングス：日本文化とキリスト教』、いのちのことば社発売、参照

<sup>10</sup> これらひとつひとつについての説明と議論をここで展開することはできないが、私が担当している東海聖書神学塾での『神学概論』クラス用テキストでは詳述して